

1105 一ヶ月一冊 定価500円（税別）

目 次

1	大会の趣旨と目的
2	大会の開催地・会場
3	大会の開催期間
4	大会の開催地・会場
5	大会の開催期間
6	大会の開催地・会場
7	大会の開催期間
8	大会の開催地・会場
9	大会の開催期間
10	大会の開催地・会場
11	大会の開催期間
12	大会の開催地・会場
13	大会の開催期間
14	大会の開催地・会場
15	大会の開催期間
16	大会の開催地・会場
17	大会の開催期間
18	大会の開催地・会場
19	大会の開催期間
20	大会の開催地・会場
21	大会の開催期間
22	大会の開催地・会場
23	大会の開催期間
24	大会の開催地・会場
25	大会の開催期間
26	大会の開催地・会場
27	大会の開催期間
28	大会の開催地・会場
29	大会の開催期間
30	大会の開催地・会場
31	大会の開催期間
32	大会の開催地・会場
33	大会の開催期間
34	大会の開催地・会場
35	大会の開催期間
36	大会の開催地・会場
37	大会の開催期間
38	大会の開催地・会場
39	大会の開催期間
40	大会の開催地・会場
41	大会の開催期間
42	大会の開催地・会場
43	大会の開催期間
44	大会の開催地・会場
45	大会の開催期間
46	大会の開催地・会場
47	大会の開催期間
48	大会の開催地・会場
49	大会の開催期間
50	大会の開催地・会場
51	大会の開催期間
52	大会の開催地・会場
53	大会の開催期間
54	大会の開催地・会場
55	大会の開催期間
56	大会の開催地・会場
57	大会の開催期間
58	大会の開催地・会場
59	大会の開催期間
60	大会の開催地・会場
61	大会の開催期間
62	大会の開催地・会場
63	大会の開催期間
64	大会の開催地・会場
65	大会の開催期間
66	大会の開催地・会場
67	大会の開催期間
68	大会の開催地・会場
69	大会の開催期間
70	大会の開催地・会場
71	大会の開催期間
72	大会の開催地・会場
73	大会の開催期間
74	大会の開催地・会場
75	大会の開催期間
76	大会の開催地・会場
77	大会の開催期間
78	大会の開催地・会場
79	大会の開催期間
80	大会の開催地・会場
81	大会の開催期間
82	大会の開催地・会場
83	大会の開催期間
84	大会の開催地・会場
85	大会の開催期間
86	大会の開催地・会場
87	大会の開催期間
88	大会の開催地・会場
89	大会の開催期間
90	大会の開催地・会場
91	大会の開催期間
92	大会の開催地・会場
93	大会の開催期間
94	大会の開催地・会場
95	大会の開催期間
96	大会の開催地・会場
97	大会の開催期間
98	大会の開催地・会場
99	大会の開催期間
100	大会の開催地・会場



THE JAPANESE CONFERENCE ON THE BIOCHEMISTRY OF LIPIDS

c/o Congre
Ko-sai Kaikan Building
Kojimachi 5-1, Chiyoda-ku, Tokyo 102-8481, Japan
JCBL@congre.co.jp
Tel: 81-3-5216-5588 Fax: 81-3-3263-4032

日本脂質生化学会事務局
〒102-8481
東京都千代田区麹町5-1 弘済会館ビル (株) コングレ内
JCBL@congre.co.jp
Tel: 03-5216-5588 Fax: 03-3263-4032

脂質生化学研究 Circular

2011

日本脂質生化学会
(JCBL)

目 次

第 53 回日本脂質生化学会のお知らせ		1
平成 23 年度日本脂質生化学会 総会・幹事会のお知らせ		6
第 53 回日本脂質生化学会 発表演題の募集		7
第 53 回日本脂質生化学会 宿泊申込のご案内		9
6 年間の会長職を終えて	西島 正弘	11
新会長としてのご挨拶と新しい役員について	和泉 孝志	13
第 53 回日本脂質生化学会を開催するにあたって	平林 義雄	14
第 52 回日本脂質生化学会を開催して	和泉 孝志	15
第 52 回日本脂質生化学会に参加して	田島 陽子	17
第 51 回国際脂質生化学会議 (ICBL) に参加して	小浜 孝士	18
第 51 回国際脂質生化学会議 (ICBL) に参加して	秋山 央子	22
第 52 回国際脂質生化学会議 (ICBL) の案内	五十嵐靖之	24
恩恵に感謝して	石井 聡	25
いつの日かこの目で確かめたい	岩淵 和久	27
脂質研究の新たなパラダイムを目指して	榎本 和生	30
ω 水酸化酵素 ―今はまだマイナーですが―	菊田 安至	31
まじめな脂質生化学者への第一歩?	白井 康仁	33
会の活動状況		35
賛助会員		39
会則		40
学会事務の取り扱いと内容の連絡先		42

第53回 日本脂質生化学会のお知らせ

期日：2011年（平成23年）5月12日（木）・13日（金）

会場：ホテル東京ガーデンパレス

〒113-0034 東京都文京区湯島 1-7-5

Tel：03-3813-6211（代表）

5月12日（木）；天空（2F）、平安A（3F）、平安B（3F）

懇親会；高千穂A（2F）

5月13日（金）；天空（2F）、高千穂A（2F）、高千穂B（2F）、

実行委員長：平林 義雄

独立行政法人 理化学研究所

脳科学総合研究センター・神経膜機能研究チーム

〒351-0198 埼玉県和光市広沢 2-1

Tel & Fax：048-467-6372

E-mail：icbl2011@riken.jp

大会ホームページ：<http://icbl.jp/wiki/JCBL:53>

発表形式：すべて口頭発表

A講演：発表15分＋討論5分＝20分

B講演：発表10分＋討論5分＝15分

講演時間は変更することもあります。

発表はすべて液晶プロジェクターを用います。

特別講演

- I. 私のスフィンゴ脂質研究；脂質シグナリングから膜ダイナミクスへ
- II. 未来を創る光分子イメージング

シンポジウム

1. 脂質ドメインのダイナミクスと細胞機能
2. 脂質と病態の最新トピックス

ランチョンセミナー

1. 「未定」
2. 「未定」

事前参加申込み締め切り：3月31日（木）（4月下旬に参加証を送付します。）
名誉会員、賛助会員の皆様には別途ご案内申し上げます。

学会参加登録費：事前参加登録 一般 6000 円 学生 3000 円
当日参加登録 一般 7000 円 学生 4000 円
（非会員の方は、要旨集代金を別途申し受けます。）

懇親会 日時：5月12日（木） 18時30分より
会場：ホテル東京ガーデンパレス 2F 宴会場「高千穂」
〒113-0034 東京都文京区湯島 1-7-5
Tel：03-3813-6211（代表）

懇親会費：一般 6000 円 学生 4000 円

事前参加登録と懇親会の事前申込みは、同封の郵便振替用紙をご利用下さい。

振込先：郵便振替口座 00110・2・623347
日本脂質生化学会

参加登録費、懇親会費は出来るだけ事前にお振り込み下さい。

会場周辺の地図と交通アクセスについては、「会場のご案内」のページをご覧ください。

宿泊の手配をご希望の方は、「宿泊申し込みのご案内」のページをご覧になり、
「宿泊申し込み書」をご利用下さい。

交通についての学会からの手配はございません。

第53回 日本脂質生化学会

特別講演、シンポジウム、ランチョンセミナーのお知らせ

特別講演：5月12日（木）

座長：平林 義雄（理研・脳センター）、小林 俊秀（理研・基幹研）

I. 「私のスフィンゴ脂質研究：脂質シグナリングから膜ダイナミクスへ」

演者：五十嵐 靖之（北大・先端生命）

II. 「未来を創る光分子イメージング」

演者：宮脇 敦史（理研・脳センター）

シンポジウム1.：5月12日（木）

「脂質ドメインのダイナミクスと細胞機能」

世話人：小林 俊秀（理研・基幹研）、岩淵 和久（順天堂大・医）

シンポジウム2.：5月13日（金）

「脂質と病態の最新トピックス」

世話人：花田 賢太郎（感染症研）、有田 誠（東大・薬）

ランチョンセミナー1.：5月12日（木）

「未定」

ランチョンセミナー1.：5月13日（金）

「未定」

なお、日程、演題タイトル等につきましては変更の可能性があります。演者等につきましても、決定次第、大会ホームページ（<http://icbl.jp/wiki/JCBL:53>）に掲載いたします。

第53回 日本脂質生化学会 会場のご案内

【会場：東京都 ホテル東京ガーデンパレス】

〒113-0034 東京都文京区湯島 1-7-5
Tel : 03-3813-6211 (代表)



電車でお越しの場合（東京駅起点）

- JR 中央線：「御茶ノ水駅」下車、「聖橋口」より徒歩 5 分
- 東京メトロ千代田線：「新御茶ノ水駅」下車、徒歩 5 分
- 東京メトロ丸ノ内線：「御茶ノ水駅」下車、徒歩 5 分



☞車でお越しの場合

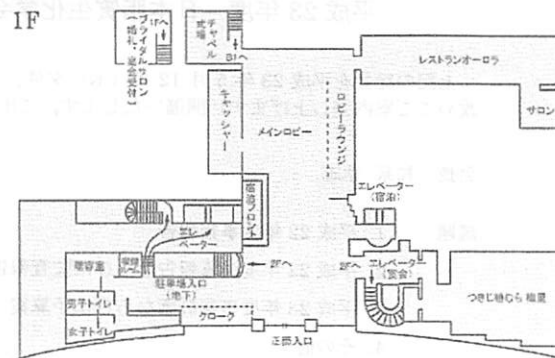
ホテル東京ガーデンパレス地下に、駐車場があります（高さ制限2.1m）。
 駐車場の予約は受け付けておりません。
 公共交通機関を利用しての来場を推奨します。

お車でお越しの場合は、
一方通行などの制限がありますので、ご注意ください。

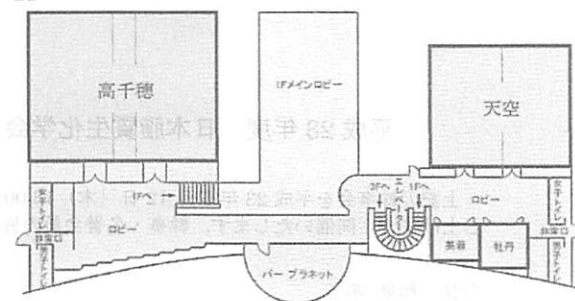
駐車料金：30分 / ¥300（以後30分毎¥300）
出庫前にフロントに申し出て頂くと、3時間割引となります。

会場見取り図

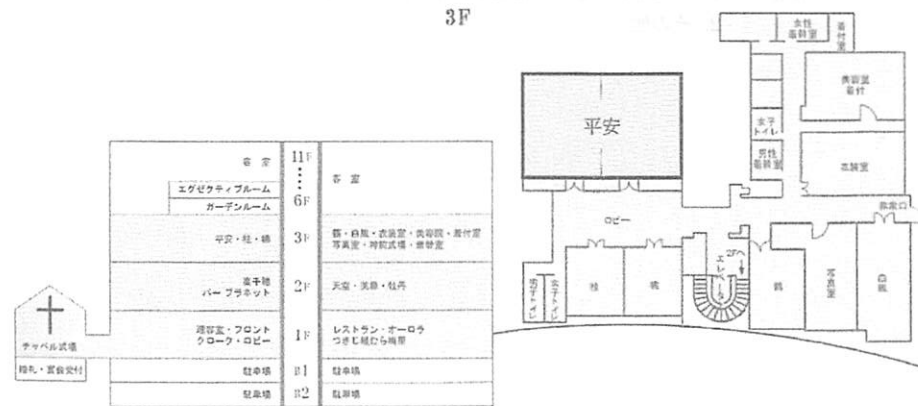
IF



2F



3F



※B・Fへは専用エレベータをご利用ください。

平成 23 年度 日本脂質生化学会 総会 のお知らせ

上記の総会を平成 23 年 5 月 12 日（木）夕刻、一般演題終了後（開催時刻・会場は改めてご案内申し上げます）開催いたします。ご出席賜りたく存じます。

会長 和泉 孝志

- 議題
1. 平成 22 年度事業報告
 2. 平成 22 年度決算報告ならびに監査報告
 3. 平成 23 年度事業計画ならびに予算案
 4. その他

平成 23 年度 日本脂質生化学会 幹事会 のお知らせ

上記の幹事会を平成 23 年 5 月 12 日（木）13:00～14:00 に（会場は改めてご案内申し上げます）開催いたします。幹事・名誉会員の皆様のご出席をお願いいたします。

会長 和泉 孝志

- 議題
1. 平成 23 年度日本脂質生化学会への提案事項の検討
 2. その他

第 53 回 日本脂質生化学会 演題の募集

○ 演題の申し込みについて

本年度も演題登録は「大学情報ネットワーク（UMIN）の ELBIS システム」を用いて、インターネット上から行います。連絡用に電子メールのアドレスが必要ですので、各自ご用意ください。また印刷用の講演要旨は、電子メールの添付ファイルで下記事務局（jcbl.org@pharm.showa-u.ac.jp）までお送りください。PDF ファイルと Word ファイルの両方を送付して頂きます。演題登録の開始は 平成 23 年 1 月 18 日（火）、締め切りは 平成 23 年 2 月 15 日（火）です。講演要旨の締め切りは 平成 23 年 3 月 1 日（火）です。

○ 演題登録のしかた

- 1) 次ページの作成要領に従って講演要旨を作成してください。
「要旨（600 字以内）」は演題登録の際に必要なですので、ワープロファイルまたはテキストファイルをご用意ください。
- 2) 日本脂質生化学会のホームページ（<http://jcbl.jp/wiki/JCBL:53>）にアクセスし、「第 53 回 脂質生化学会演題登録」を選択してください。
- 3) 画面の指示に従って演題登録を行ってください。必須項目を空欄のままにしておきますと、登録ができませんのでご注意ください。登録内容は締め切りまで変更可能ですが、登録の際に入力したパスワードが必要になりますので、必ずメモを取ってください。
- 4) 登録終了後、抄録登録【受付番号】というタイトルの電子メールが発表代表者に届きますので必ず保存しておいてください。
- 5) インターネットが使用できない方、登録ができない方は、講演要旨をお送り頂く前に、以下の講演要旨送付先までご連絡ください。

○ 講演要旨送付先：（PDF ファイルと Word ファイルの両方をメールの添付書類でお送りください。）

E-mail : jcbl.org@pharm.showa-u.ac.jp
〒142-8555 東京都品川区旗の台 1-5-8
昭和大学 薬学部 衛生化学教室
日本脂質生化学会 講演要旨受付 （担当：中谷 良人）
Tel : 03-3784-8197 Fax : 03-3784-8245

○ 第 53 回 日本脂質生化学会についてのお問い合わせ

〒351-0198 埼玉県和光市広沢 2-1
独立行政法人 理化学研究所 脳科学総合研究センター・神経膜機能研究チーム
第 53 回 日本脂質生化学会 実行委員
Tel & Fax : 048-467-6372 E-mail : jcbl2011@riken.jp

第 53 回 日本脂質生化学会 講演要旨作成要領

1. テンプレートを使用する場合、日本脂質生化学会ホームページ(<http://jicbl.jp/wiki/JCBL:53>)から「講演要旨作成テンプレート」をダウンロードし、マイクロソフト Word で作成してください。テンプレート上で入力すれば字体や大きさが統一されます。
2. テンプレートを使用されない場合は以下の要領で作成してください。
 - * A4 サイズ、縦 260mm × 横 170mm の大きさに作成してください。
原則として字の大きさは 12 ポイント、フォントは「MS 明朝」をご使用ください。
要旨集印刷の際、4/5 程度に縮小されて印刷されます。ページ番号は付けないでください。
 - * 演題名： 全角 8 文字目から書き始め、2 行以内に納めてください。
 - * 氏名・所属： 演題名より 1 行空けてください。全角 8 文字目から氏名を書き、所属は適当な略記を用いて括弧内に入れてください。発表者（または連絡著者）の電子メールアドレスを記載してください。
 - * 要旨： 氏名・所属より 1 行空けてください。全角 1 文字空けて書き始めてください。全体を枠で囲んでください。
 - * 本文： 要旨より 2 行空けてください。
3. 講演要旨の送付にあたって。
 - * 講演要旨の PDF ファイルおよび Word ファイルを、前ページの「講演要旨送付先」まで、電子メールの添付書類としてお送りください。
 - * 電子メールの「件名」の欄に、演題登録後に届いた「抄録登録 [受付番号]」を明記して下さい。

演題要旨締め切りは 平成 23 年 3 月 1 日（火）です。

なお、Web からの演題登録（締切 2 月 15 日（火））を忘れずに行ってください。

第 53 回 日本脂質生化学会 宿泊申し込みのご案内

学会会場・懇親会会場である「ホテル東京ガーデンパレス」に宿泊をご希望の方は、学会専用の特別料金が適用されますので、「宿泊申し込み書」を使用して **FAX: 048-467-6372** にてお申し込みください。

シングル（30 部屋）・ツイン（10 部屋）のみのご用意となります。ホテル東京ガーデンパレス以外に宿泊の場合は、各自で手配をお願いします。

1. 申込受付期間：（なるべく早くお申し込みください。満員になり次第締め切ります。）
平成 23 年 1 月 18 日（火）－ 平成 23 年 3 月 31 日（木）
2. 料金適用期間： 平成 23 年 5 月 11 日（水）－ 平成 23 年 5 月 13 日（金）
3. 宿泊施設： ホテル東京ガーデンパレス
〒113-0034 東京都文京区湯島 1-7-5
Tel: 03-3813-6211（代表）
<http://www.hotelgp-tokyo.com/index.html>
4. お申し込み方法：
次ページ「宿泊申し込み書」に必要事項をご記入の上、**FAX: 048-467-6372** してください。
1 週間以内に折り返し予約確認書を FAX で送信します。予約内容を必ずご確認ください。
また、訂正・変更が生じた場合は、FAX または電子メールにて速やかにご連絡ください。
満室に成り次第締め切らせて頂きますので、ご希望に添えないことがありますことをあらかじめお含みおきください。
5. お支払い方法：
FAX でお送りする予約確認書で金額を確認の上、郵便局に備え付けの郵便振替用紙をご利用ください。郵便振替用紙の通帳欄に予約番号をご記入ください。

振込先： 郵便振替口座 00110-2-623347
日本脂質生化学会

予約確認書をお送りしてから 10 日以内に代金をお振り込みください。

期日までに入金が確認出来ない場合には予約を取り消したものとみなします。

6. 宿泊料金： シングル 8,000 円 ツイン 14,500 円
（朝食付きプランは、プラス 1,050 円 / お一人様・一泊）
7. 変更・取り消しについて
訂正・変更・取り消しが生じた場合は、FAX または電子メールにて 4 月 28 日（木）までにご連絡ください。ただし、事務手数料が発生する可能性があります。
8. お申し込み・お問い合わせ
〒351-0198 埼玉県和光市広沢 2-1
独立行政法人 理化学研究所 脳科学総合研究センター・神経膜機能研究チーム
第 53 回 日本脂質生化学会 実行委員会
Tel & Fax: 048-467-6372 E-mail: jicbl2011@riken.jp

第53回日本脂質生化学会 「ホテル東京ガーデンパレス」宿泊申込書

FAX: 048-467-6372

独立行政法人 理化学研究所

脳科学総合研究センター・神経膜機能研究チーム 第53回日本脂質生化学会実行委員会 宛

* 申込締切日: 平成28年8月31日(木) までに必着

* 満室になり次第締め切ります (シングル: 30室、ツイン: 10室 をご用意しております)

ふりがな お申込者名	男・女	御所属	職位
〒 -	電話	FAX	
御連絡先住所	メール		

☐ シングルの希望します ¥8,000/1泊 (朝食付きは¥1,050/1泊 追加)

ふりがな	宿泊日			小計
宿泊者名	5/11 (木)	5/12 (木)	5/13 (金)	
	朝食なし	朝食なし	朝食なし	
	朝食あり	朝食あり	朝食あり	

お名前をご記入の上、希望日・ご希望のプランに○をつけてください

☐ ツインを希望します ¥14,500/1泊 (朝食付きは¥1,050/ お1人様1泊 追加)

ふりがな	宿泊日			小計
宿泊者名	5/11 (木)	5/12 (木)	5/13 (金)	
①	朝食なし	朝食なし	朝食なし	
	朝食あり	朝食あり	朝食あり	
②	朝食なし	朝食なし	朝食なし	
	朝食あり	朝食あり	朝食あり	

お名前をご記入の上、希望日・ご希望のプランに○をつけてください

【連絡欄】(ご希望などがあればこちらにご記入下さい)

【実行委員会記入】: 予約番号

6年間の会長職を終えて

前会長 西島 正弘

平成17年から平成22年までの6年間に亘り、伝統ある日本脂質生化学会の会長を務めさせていただき、和泉孝志新会長にバトンタッチいたしました。この間、会員の皆様には、ご協力とご援助を頂き、誠に有難うございました。特に、私と共に役員を務めていただきました庶務幹事の新井洋由先生、会計幹事の工藤一郎先生と小林哲幸先生、会計監査の脊山洋右先生、並びにプログラム編成作業や幹事会の準備など諸々の実務を担当していただきました青木淳賢先生と有田誠先生、新井研究室の方々には深く感謝申し上げます。

私が会長として選出された平成16年に、本学会が事務を委託してきた学会事務センターが倒産したため、私の最初の仕事は脊山先生とともに新しい事務委託業者を探すことでありました。最終的には、会社の規模や学会関係の業務の実績などから、(株)「コングレ」にお願いすることになり、事務局は「コングレ」内に置き、担当者の長尾さんのご尽力もあり、6年間、何のトラブルなく本学会の事務・運営を進めることができました。

本学会の主要な収入源は、会員の皆さんからの会費ですが、それに加え、賛助会員の会費と講演集の広告収入も重要な収入源であります。賛助会員並びに広告掲載にご協力いただきました企業の方々にも紙面を借りて厚くお礼申し上げます。これまで皆様のご協力での収入は比較的安定に進んできましたが、平成22年度は、我が国の経済状況が芳しくないため、会費以外の収入が大幅に減少しました。現在会費は3000円ですが、しばらくは景気回復が見込めないため、値上げすることも考えなくてはならないと思います。その節は、会員の方々には是非ご理解をお願い申し上げます。

この6年間の年会は、金沢、東京、札幌、徳島、名古屋、伊香保で開催され、どこも盛会に行われました。実行委員長を担当された吉本谷博先生、工藤一郎先生、五十嵐靖之先生、徳村彰先生、横山信治先生、和泉孝志先生に感謝申し上げます。徳島では50回の記念となる学会で、阿波踊りも楽しみました。開催地については地方で開催する希望が多く、今後もこのような傾向が続くものと推測します。

1989年に本学会有志により立ち上げられた脂質情報データベースは、生理活性脂質データベースを経て、2006年から本学会公認のデータベースとなり、名称を「LipidBank」と改め、脂質データベース構築委員会が、データベースのシステムと内容の維持・更新を行っております。現在、八杉悦子先生、有田正規先生を中心に、日本学術振興会科学研究費により改良作業を続けております。構築委員の方々にはご協力に感謝するとともに、これからもさらに良いデータベースとなるようよろしくお願いいたします。会員の方々にも、データの登録にご協力をお願いいたします。

最近、本学会の先生方が中心となり、第4回ホスホリパーゼA2と脂質メディエーター国際会議(新井洋由先生、2009年5月)、内藤コンファランス「生体膜ダイナミクスと

脂質生物学」(五十嵐靖之先生、2010年6月)、キーストンシンポジウム「活性脂質メ
ディエーター: 生化学と病気」(清水孝雄先生、2010年6月)など、脂質が関係する数々
の国際学会が国内で開催されました。また、私が研究総括を務め、脂質研究者も沢山採
集されたJSTさきがけ研究「代謝と機能制御」やCREST「代謝調節機構解析に基づく細胞
機能制御基盤技術」、横溝岳彦先生が代表者の新学術領域研究「生命応答を制御する脂質マ
シナリー」などの比較的大型の研究補助金も獲得されました。これらのことは、我が国に
おいて脂質研究のレベルが高く、また大いに注目されている分野であることを示すもので
あります。今後も、和泉新会長の下で、本学会と我が国の脂質研究が益々発展することを
期待いたします。

新会長としてのご挨拶と新しい役員について

会長 和泉 孝志

平成22年6月、群馬県の伊香保温泉で開催された日本脂質生化学会の総会において、
西島正弘会長の後任にご推挙いただき、平成23年1月から本学会の会長を務めさせて
頂くことになりました。歴代会長は、安田守雄先生から始まり、原一郎先生、山川民夫
先生、野島庄七先生、脊山洋右先生、そして西島正弘先生と引き継がれてきましたので、
私は第7代目の会長ということになります。長い伝統と歴史があり、日本の脂質生化学
を中心的に発展させてきました本学会の会長を仰せつかり、その責任の大きさに身が引
き締まる思いです。他の新しい役員は、庶務幹事が原俊太郎先生、会計幹事が保坂公平
先生です。会計監査の西島正弘先生と共に本学会のお世話をさせていただきます。平成17
年から3期6年間の長きにわたり本学会の役員を担当されました会長の西島正弘先生、
庶務幹事の新井洋由先生、会計幹事的小林哲幸先生、会計監査の脊山洋右先生、並びに
事務局にあって、幹事会のお世話や要旨集の作製など多くの実務を担当されました青木
淳賢先生、有田誠先生には、会員に代わりまして厚くお礼を申し上げます。

厳しい政府の財政状況の中、基礎科学研究に対する予算は年々減少していく可能性が
あります。また、学生の理科離れや学力低下、厳しい就職戦線、さらに薬学部の6年制
導入や、若手医師の臨床指向など、脂質生化学研究をとりまく環境には、厳しいものが
あります。一方で、ゲノム科学や細胞生物学、質量分析学などの発展に伴って、脂質生
化学研究もますます高度化し、専門化してきています。脂質の役割も、がん、免疫、脳・
神経、感染症など、様々な領域で明らかにされ、見直されつつあります。このような時
期にあって、同じ分野の研究者が集まって最新の情報を交換し、研究成果を発表する場
は、大切さを増しているといえます。

日本脂質生化学会は、会員数が名誉会員を含めても約670名の小さな学会ですが、同
じ分野で研究交流ができる丁度良い規模の研究集団ということが出来ます。本学会は伝
統的に、年齢や経歴に関係なく、自由な雰囲気の中で活発に研究成果を発表する場を提
供してきました。今後もこの伝統を引き継ぎながら、本学会が常に学問の最先端の交流
の場として発展していきますよう最善を尽くしていく所存です。会員の皆様のご支援の
程、よろしくお願い致します。

第 53 回日本脂質生化学会を開催するにあたって

実行委員長 理化学研究所 脳科学総合研究センター 平林 義雄

平成 23 年 5 月 12 日（木）、13 日（金）の両日、ホテル東京ガーデンパレスにて第 53 回日本脂質生化学会を開催させて頂くことを、光栄に思っています。通常の日程より一ヶ月ほど早い開催で皆様にはご不便をお掛けすることになりますが、どうか奮ってのご参加をお願いする次第です。今回は、私の所属いたします理化学研究所から多くのサポートを頂くことになりましたので、共催という形で開催することにいたしました。

感染症研究所・花田賢太郎部長、東京大学・有田誠准教授、理化学研究所・小林俊秀主任研究員、順天堂大学・岩渕和久教授の企画で、特別シンポジウムを開催することを予定しております。また、北海道大学・五十嵐靖之特任教授、理化学研究所 脳科学総合研究センター・宮脇敦史シニアチームリーダー、両氏の特別講演を用意いたしました。生命科学の将来に向けて全力で走る両先生のお話に、大いに期待して頂きたいと思っています。

私の所属する研究所は学生等の人材が全くありませんので、東京周辺の大学の諸先生のご協力を仰ぐこととなりました。また、順天堂大学の岩渕教授には、会場であるホテル東京ガーデンパレスを予約するに当たり多くの協力をいただきました。

会場は、都内の大変交通の便の良いところで行われます。残念ながら、温泉とは無縁の場所ですが、お茶の水駅周辺は飲食店には事欠きませんので、会議の後、普段なかなかお会いする機会のない先生との懇親を深め、あるいは仲間同士で研究のディスカッションを熱っぽく語り合って頂ければと願っています。

この学会は、過去何年かおきに東京で開催されてきました。第 39 回（井上圭三先生）、第 44 回（西島正弘先生）第 48 回（故、工藤一郎教授）、という具合に、優れた業績を挙げられた諸先生により開催されてきました。この度の役目により重い責任を感じますが、参加される皆様の期待の一つでも応えられればと願っています。多くの学会会員の皆様のご参加を心からお待ちしております。

第 52 回日本脂質生化学会を開催して

群馬大学大学院医学系研究科 生化学分野 和泉 孝志

平成 22 年 6 月 14 日 15 日の両日、群馬県の伊香保温泉で第 52 回日本脂質生化学会を開催いたしました。本大会の運営に際して、西島正弘会長を始めとする学会役員、事務局の方、座長をお引き受け頂いた先生方など、多くの方々にご尽力頂きました。また、群馬大学保健学科の保坂公平教授、および群馬大学生体調節研究所の岡島史和教授には、シンポジウムの企画のみならず運営面でも大変お世話になりました。この場をお借りして、厚くお礼申し上げます。当初は 2 箇所に分かれての開催を考えておりましたが、森秋旅館に 3 会場を確保することができましたので、一箇所にまとめて行いました。会場が少し狭くてご迷惑をおかけしましたが、移動や運営は随分楽になりました。どの会場でも、リラックスした様子で熱心な討論が行われていたように思います。これも、温泉旅館で開催した効果かも知れないと、主催者として嬉しく思っております。

参加登録者は 207 名ですが、その他お手伝い頂いた学生の方などを含めると総勢 250 名以上の参加を頂きました。特別シンポジウムとして「ロイコトリエンー基礎と臨床」を開催し、3 名の外国からの演者と九州大学の横溝岳彦教授に講演して頂きました。また、2 つのシンポジウム「リソ脂質受容体研究の新展開」「アシル転移酵素研究の新展開」では、それぞれ 7 題および 6 題のご講演を頂きました。一般演題は 67 題と、例年よりやや少なめでした。これは、関連する学会の開催日程との関係などがあったものと思います。しかしながら、いずれの一般演題も学問的な水準は高く、新しい概念や新しい研究手法を取り入れての発表が多かったと思います。今後の更なる研究の発展が大いに期待できる内容でした。ランチョンセミナーとして 2 題「脂質研究に役立つデータベース紹介」「スフィンゴ脂質の分子種多様性・疾患バイオマーカーとしてのスフィンゴ脂質について」を企画しました。前者では、日本脂質生化学会が中心に取り組んでいる LipidBank 及び関連する 3 つの WEB サービスが実演を交えて紹介され、後者では愛知県がんセンター研究所の京ヶ島守室長によって高エネルギー CID を装備した MALDI-TOFMS を用いた解析例が紹介されました。

懇親会場は森秋旅館の大宴会場においてお一人ずつお膳を用意して行われました。参加者はお座敷の限度一杯の 150 名でした。前半には、群馬県の代表的な芸能であります国定忠治の演目を、新国劇の元俳優小林崇久氏に演じて頂きました。また、もう一つの群馬県の芸能である八木節を、群馬大学医学部附属病院の八木節愛好会の皆様にご披露頂きました。お楽しみ頂けたとしたら幸いです。その後は、何人かの先生にお話しを

頂きながら、和やかにお酒を酌み交わし、交流を深めることが出来ました。特に、武富保名誉会員には、昭和45年に同じく伊香保温泉で開催された第12回の研究集会の様子を研究活動への激励のお言葉を交えながら話して頂きました。有り難うございました。その夜11時から、サッカーワールドカップの日本対カメルーン戦があり、日本が1対0で勝利しました。第44回大会（西島実行委員長）の早稲田国際会議場のパブリックビューにおいて観戦したチュニジア戦での勝利に続いて2度目の快挙でした。伊香保温泉の「黄金の湯」とともに、堪能して頂けたのではと思います。

第52回日本脂質生化学会はこのように成功裏に終わりましたことをご報告いたします。ご参加頂きました多くの会員の皆様に、心よりお礼を申し上げます。

第52回日本脂質生化学会に参加して

東京大学大学院医学系研究科 メタボローム講座

国立医薬品食品衛生研究所 田島陽子

脂質メタボロミクス研究者には「脂質生化学」、「質量分析 (MS)」、「統計解析」の3種の専門性（知識と技術）が必要である、と同研究室の先輩より教わりました。東京大学のメタボローム講座（田口良教授研究室）に所属した当初、マスのマの字も分らなかった私は、とにかくにも「MSの技術」を習得することを第一に勉強を始めました。

2009年、名古屋で行われた脂質生化学会で初めて口頭発表の機会を頂きました。そこで私は、イメージングマスペクトロメトリーを含めた技術を用いてマウス脳における脂質分子種の局在を解析したデータを発表しました。質疑応答を受け、また多くの脂質の専門家よりご意見を頂き、各々の分子種の役割や生理的意義について考察する良い機会となりました。また同時に、今後脂質メタボロミクスという分野を研究していくにあたり幅広い「脂質の知識」の必要性を感じ、自分のもつ狭い視野を広げていく努力をしたいと思いました。本学会は、脂質生化学という領域内で様々な分野の「脂質の知識」を得るためにとても貴重な場であると感じました。

発表の場から一年後、2010年6月14、15日に開催された第52回脂質生化学会は群馬県伊香保にて、学会では珍しい旅館でのお座敷講演という形式が印象的でした。私は伊香保の土地は初めてだったので、温泉や食事とても楽しみに向かいました。伊香保は想像していた以上に坂が多く、かなり急で宿泊先から会場へ向かうまで息切れをしながら歩いたことを思い出します。講演会場には旅館の居心地の良い雰囲気があり、学会は引き締まりつつも和やかな空気のなか行われました。一年前より少しだけ自分で物を考え疑問を持つようになった私は、より興味深く先生方のご発表を拝聴させて頂きました。今年は特に、特別シンポジウム「ロイコトリエンの基礎から臨床」が行われ、例年以上に海外からの著名な先生方が多く参加されており、日本人唯一の発表者でおられる横溝岳彦先生（九州大学）をはじめとした4人の先生方のご発表には終始圧巻されたのを覚えております。また、修士の間ご指導頂いた北里大学の今井浩孝先生の研究のご発展には、いつも感銘を受け、データの裏にある後輩の努力を想い自分も頑張らなければと励みになりました。

今回の学会は、東大メタボローム講座の研究員として同研究室の方々とは過ごす最後の学会だったため、特に思い出深いものとなりました。田口先生をはじめ、各々が離れた場所で新しくスタートすることになりますが、また本学会で集まり、先生方の研究のご発展を拝聴できる事を楽しみにしております。私自身も、成長をお見せできる場所になるよう努力して参ります。最後になりましたが、本学会を主催された実行委員長の和泉孝志先生をはじめ、関係者の皆様方にこの場を借りて感謝申し上げます。

今年度のICBLは、9月7~11日にスペインのビルバオで開催されました。ビルバオはスペイン北部にある港湾都市で、バスク自治州、ビスカヤ県の県都ですが、この地を含む「バスク地方」というと、ピレネー山脈を挟みフランスとスペインの両国をまたぐ地域を指し、他の地域とは異なる文化を持っています。この地はたいへん歴史が古く、アルタミラやラスコーの洞窟は動物の壁画で特に有名です。この地域で話されているバスク語はとても難解で、言語の由来やバスク人の民族的系統などについては、未だはっきりと解明されていないようです。この地で育まれたバスク料理は世界的にも高く評価されており、学会中のlunchやdinnerでは、ワインとともに存分に満喫させていただきました。このような貴重な伝統を守っていくと、現代でもバスク国全体の独立を目指す運動が続いているようで、「バスク祖国と自由：ETA」というグループが布をかぶってテレビのニュース番組に出ていたのを、ホテルでは毎日のように目にしました。

今年度のICBLは、「Physical chemistry of lipids」、「Lipids and biomembranes」、「Bioactive lipids and lipidomics」、「Lipid-protein interactions and lipid trafficking」、「Lipid-binding proteins」、「Lipids in health and disease」、「Plant lipids」という7つのトピックが採り上げられ、26のPlenary lecture、28のShort Oral presentation、136のposter presentationで構成されていました。日本の脂質生化学会では複数の部屋に分かれているため、どうしても自分の関連分野の演題に足を運んでしまいがちですが、ICBLでは全ての講演に触れることができ、普段はあまりなじみのないテーマからも最新の興味深い知見を得ることができ、大いに刺激を受けました。

まず学会初日、15:00からのregistrationまで時間があつたため、朝は喫茶店のような雰囲気だったBar（バル）でコーヒーとピンチョス（小さく切ったパンに少量のおかずをのせて楊枝で留めたもの）を朝食代わりに軽く食しました。ガイドブックを片手に、スペイン語での会計は厳しいのでは？と不安でしたが、英語が通じたので安心しました。その後、現代美術で有名な「ビルバオ・グッゲンハイム美術館」を訪れました。近年の都市開発の一環で1997年に開館したこの博物館は、うねる金属板で覆われた博物館の外観もさることながら（写真1上）、入口付近では花で覆われた巨大な犬が鎮座しており（写真1下）、伝統あるビルバオの町でこれらが存在感を放っているだけでもインパクトは十分でした。展示物としては、鉄を主体とした前衛的なアートや絵画、またちょうど期間限定で開催されていたルソーの絵画展が印象的で、作品ごとに解説をしてくれるmobile phoneを耳にあてながら楽しむことが出来ました。その後、近くのレストランで昼食をとり、学会会場に足を運んで18:00の開会式から参加させていただきました。Openingでは、日本の文部科学省に相当すると思われる役人の方の挨拶もあり、研究の発展向上を期待するといった旨のお話をされ、日本の学会との違いを感じました。その後、「14th Van



写真1. グッゲンハイム美術館（上）
花に覆われた巨大な犬（下）

Deenen Lecture」として、Texas大学のW. Dowhan先生の講演を興味深く聴かせて頂きました。PEの有無によって膜タンパク質のtopologyが変化するメカニズムを見事に説明しておられました。その後、今回の学会ではexcursionに替わる唯一の娯楽として、「Gintonic ensemble」というバンドグループによる演奏がWelcome receptionとして開催されました。スペイン語と、おそらくバスク語と思われる挨拶につづき、とてもモダンなステージ上で乗りの良いjazz musicを中心に1時間ほど生演奏され、今回の演題をチェックしながら楽しみました。そして、もうすぐ21:00になろうかというのに夕方のような薄暗がりの中、滞在しているホテルに移動し、初日のdinnerを楽しみました。北海道大学の五十嵐先生と光武先生、お茶の水女子大学の秋山さんとともに、University of the Basque Countryの方々とも同席し、ボリューム満点の食事とワインを堪能しながら、バスク地方の話などで盛り上がりました。彼らが同僚たちと話をしているときは、明らかにスペイン語とは異なった、バスク語と思われる複雑な言葉をしゃべっておられたのが印象的でした。

2日目、午前の「Physical chemistry of lipids」では、V.A. Frolov先生（Bilbao, Spain）による、membraneのfusion、fissionに関する明解な発表が勉強になりました。午後のposter sessionは、階段を下がった小さな部屋で連日30~40演題が発表されていましたが、この日はのちにポスター賞を受賞されたK. Rajamäki先生（Helsinki, Finland）による、マクロファージでのinflammasome活性化の発表がとても参考になりました。その後の「Lipids and biomembranes」の講演では、五十嵐先生によるSM synthase 2とceramide kinaseに関するお話を興味深く聴かせて頂きましたが、冒頭で、「バスク州に隣接するナバーラ州で生まれたフランシスコ・ザビエルは、日本に初めてキリスト教を伝えました。」と、日本とバスクの縁について熱く語られ、私自身もバスクに対して愛着を感じることができました。またD. E. Vance先生（Edmonton, Canada）の、PE-メチルトランスフェラーゼKOマウスを用いた全身性脂質代謝変動に関するお話も興味深い内容でした。そしてこの日のdinnerでは、五十嵐先生のお誘いでGraz大学のF. Spener先生や、W. Dowhan先生など重鎮の先生方と相席となり、はじめは大変恐縮な思いでしたが、研究のみならずいろいろなお話をざっくばらんにしていただき、とても貴重な経験をさせていただきました。

3日目、午前の「Bioactive lipids and lipidomics」のセッションでは、大阪大学の東城先生による発表や、L. Halasiddappa先生（Graz, Austria）からは、POVPCやPGPCといった酸化脂質で刺激したマクロファージにおけるceramide synthaseの変動について、興味深く聴かせていただきました。またこの日、私はポスター発表をさせていただきましたが、lunchの後のposter sessionということもあり、リラックスした雰囲気であまり乗り切ることができたように思います。その後の「Lipid-protein interactions and lipid trafficking」に関する講演では、T. Futerman先生（Rehovot, Israel）のceramide synthaseに関する発表は内容もさることながら、軽妙で聴衆を引き込むプレゼンテーションには、大いに刺激を受けました。またU. Stemmer先生（Graz, Austria）による、蛍光酸化脂質を利用した修飾タンパク質のプロテオミクス解析は、とても参考になりました。この日のdinnerは招待講演者のみで行われたため、私は学会で知り合った人たちと一緒に町へ足を運び、夜は酒場の表情を見せるBarで、味わい深い生ハムとチーズをビールやワインとともに楽しみました。

4日目は、「Lipid-binding proteins」と「Lipids in health and disease」の講演でしたが、中でもU. P. Steinbrecher先生（Vancouver, Canada）による、酸化LDLが引き起こすマクロファージのシグナル伝達経路の変動に関する発表など、興味深い演題を多く聴かせていただきました。またposter sessionでは関連分野の演題が多く、つたない英語ながらいろいろな演者の先生方とdiscussionさせていただき、理解を深めることができました。学会を通して、多くの生物種を対照として基礎から応用にかけて広い分野がバランスよく採り上げられていたように感じました。

今回の学会では excursion がなかったこと、また午前と午後の coffee break では、lunch と dinner のことを忘れてコーヒータンとオレンジジュースと一緒にクロワッサンなどのバリエーション豊富なパン類をついつい頬張ってしまい、いつまでたっても満腹感が収まらなかったことから、この日は途中で少し時間をとって旧市街を散策し、古きビルバオの町並みに触れることにしました(写真2)。学会会場付近から地下鉄で旧市街の中心部まで移動することもできましたが、自分の足でゆっくり歩くことで、都市開発によって整備された町並みと、教会などの伝統的建築物が共存する様子を肌で感じることができました。途中でバス博物館に立ち寄りしましたが、バスコ民族の歴史や生活道具などが展示されており、現代の美術館とはひと味違った、伝統的な生活感漂う“古きバスコ”を楽しむことが出来ました。この日、学会最後の dinner では、ポスターと口頭発表の award ceremony が盛大に行われました。最初に出された生ハムは特に絶品で、ウィットの利いたスピーチなどで楽しい一時を過ごしました。学会参加者と共にした食事は、連日の充実した lunch ではワインとともに1時間半ほどかけてゆっくりと、それに加えて学会中の coffee break でいつもお腹一杯の状態だったのですが、夜もこれまた豊富な dinner は満腹感を忘れてしまうほどたいへん美味しく、重量級のデザートもいつの間にかスッとお腹に入っていました。何人かの日本の先生方に尋ねましたが、さすがにここまで盛りだくさんの食事と美味しいワインは、他国の国際学会でもあまりないとのこと、貴重な経験をさせていただいたと改めて思いました。

学会最終日は、“Plant lipids”というトピックで、N. Ruiz-López 先生 (Herts, UK) からは transgenic plants による ω -3 長鎖脂肪酸産生の試み、ラストの東大院・総合文化の片山先生からは植物ミトコンドリアにおける cardiolipin の意義についてなど、新鮮な発表を聴かせていただきました。講演は午前で終了し、最後の lunch とともに参加者との別れを惜しんだ後は、地下鉄に20分ほど乗って、2006年に世界文化遺産に登録された伝統あるビスカヤ橋を訪れました(写真3)。1893年に建設されたこの鉄橋は世界最古の運搬橋とのことで、ゴンドラが24時間営業で対岸を行き来しています。まずこのゴンドラで対岸に渡った後、およそ50mほどの高さの歩道橋を歩いて楽しみましたが、橋の上から見渡す港や湾、鮮やかな色合いの家々の並びといった壮大な眺めは最高で、時間を忘れるほど楽しみました。さすがに、先発されていた西島先生が「あそこは絶対に行った方がいい!!」と絶賛されていただけのことはありました。また夜には、グッゲンハイム博物館ときれいに整備された川沿いの公園を散策し、初日の昼に訪れたときとはまたひと味違った夜の雰囲気を感じることができまし



写真2. ビルバオ旧市街の町並み



写真3. 世界遺産のビスカヤ橋とゴンドラ(上)、橋の上からの眺め(下)

た。この他にも、ビルバオ空港に移動する前に、グッゲンハイム博物館に近いビルバオ美術館を訪れましたが、12世紀から現代にかけて多くの絵画が展示されており、とても見ごたえがありました。

来年度の 52nd ICBL は、ポーランドのワルシャワで、8月30日～9月3日に開催されます。“Expanding the Horizons of Lipidomics”という主題のもと、トピックは“Lipids in molecular medicine”、“Lipids in regulation of gene expression”、“Lipids in signaling and intracellular trafficking”、“Membrane microdomains, lipid binding proteins and membrane repair”、“Lipid modifications of macromolecules”、“Isoprenoid lipids”、“Lipid-protein interactions”とのこと(<http://www.icbl-2011.org>)。

私にとって今回の ICBL は、海外での国際学会への初参加ということもあり、いろいろな意味で新鮮な経験をすることができました。特に今年は、過去113年でもっとも暑かったという日本から離れて、とてもさわやかな気候の中で約1週間を過ごすことができました。古い文化と新しい文化が融合したビルバオの地で、日本人の参加者は20名くらいだったでしょうか。昨年のドイツでの ICBL と比べると少なかったようですが、西島先生、五十嵐先生をはじめ、日本から参加された多くの先生方に気をつけていただき、思い出に残る充実した日々を送ることが出来ました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

51st International Conference on the Bioscience of Lipids (ICBL)に参加して

お茶の水女子大学大学院 ライフサイエンス専攻

博士後期課程3年 秋山 央子

ビルバオ空港からバスに揺られ窓の景色を眺めていると、町の入り口に大きな銀色のアーチが見えました。グッゲンハイム美術館です。伝統ある町を守る要塞のような美術館のお出迎えに圧倒され、ビルバオでの1週間が始まりました。

海外で開催される国際学会への初めての参加、また1人で海外旅行をするのも初めてだった私は、まず会場に辿り着けたことで一安心でした。会場に到着して一番初めに驚いたことは、女性の参加者が非常に多いということでした。4割近くを女性が占めており、その中でも若手研究者が多かったことが印象に残っています。受付をするために列に並んでいたときのことで、目の前に並んでいた人が手にしていたネームプレートに、私は思わず目を疑いました。なんと、その方は私が何度となく読んでいた論文のグループのボスである、László Vigh 先生 (Szeged, Hungary) でした。そのときは、活字で目にしていた人が突然目の前に現れたことが信じられず、話しかけることができませんでしたが、幼い頃有名な人に初めて会ったときのような感覚を覚えました。いざ学会が始まってからもこの感覚は収まりませんでした。今回に限らず、ICBL ではスフィンゴ脂質や糖脂質についてのトピックが多いため、糖脂質を研究対象としている私が憧れを抱いていた先生方が次々に舞台上で講演をされ、本当に夢のような毎日でした。特に、Kai Simons 先生 (Dresden, Germany) による“ラフトに局在する脂質との結合を介した膜貫通タンパク質のラフトへのリクルート”に関するお話は、大変興味深かったです。また、私が研究対象としている糖脂質が熱ストレス感知機構に関与していることから、Diego de Mendoza 先生 (Rosario, Argentina) による“バクテリアの低温環境適応システムとして、細胞膜の desaturase が温度変化に伴う細胞膜の厚さの変化を感知し、膜流動性を調節する”というお話は、大変刺激的で終始目が離せませんでした。自身のポスター発表の際には、幸運にも受付で話し掛けそびれてしまった Vigh 先生が聞きに来てくださり、私のつたない説明に熱心に耳を傾けてくださって、多くの貴重なアドバイスをいただきました。思うように説明できず、もどかしい思いばかりでしたが、異国の地において自分の言葉で研究内容を説明し、議論をさせていただいたことで、これまでに経験したことが無いような達成感と充実感がもたらされ、今後の研究に対するモチベーションがさらに高まりました。

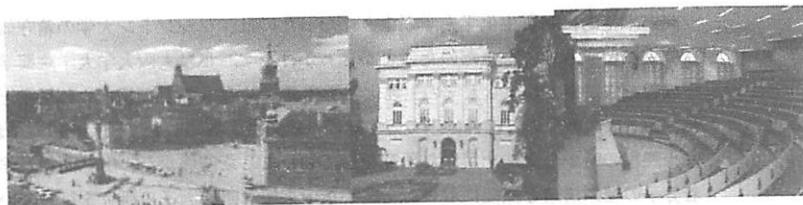
ICBL には、ヨーロッパを中心に多くの大学院生やポスドクの方々が参加しており、研究について意見交換をするだけでなく、各国の文化の違いやそれぞれが考える将来のビジョンなど、同世代の生の声を聞くことができました。特に、女性若手研究者のたくましい姿にはとても勇気付けられました。楽しくランチをしている最中にも、研究の話題がよく出てきていましたし、皆自分の研究の話になるととても情熱的に語ってくれました (皆同時

に自分の話をしていることが多く、ちゃんと聞いているのかな?と思うこともありました。若手研究者の発表の中から選ばれるポスター賞とオーラル賞においても、受賞者4人中3人が女性という大変素晴らしい活躍ぶり、女性が多く活躍している研究分野だということに感激しました。

非常に短い期間ではありましたが、研究についてばかりでなく、各国の文化についても語り合うことができ、密度の濃い、大変充実した日々を送ることが出来ました。最後の Dinner において、現 ICBL 会長 Gunter Daum 先生 (Graz, Austria) が“芸術と研究に通じるもの”というお話をされました。インスピレーションが大切であること、また、ゴッホを例に挙げ、そのときは人々に理解されなくても何十年も経ってから人々に受け入れられることがあるという内容で、お話自体もとても印象的でしたが、そのお話に耳を傾ける皆さんの生き生きとした表情が素敵でした。“私たちは ICBL という家族です”と仰ってお話を終えられた Daum 先生が、テーブル1つ1つを回って写真を撮っておられた姿もとても印象的で、会場全体が温かい雰囲気になっており、または是非参加したいと思いました。最後になりましたが、五十嵐先生や徳村先生をはじめ、日本からの先生方とご一緒させていただいたことで、学会期間中、心細い思いをすることなく毎日楽しく過ごすことができました。この場をお借りいたしまして感謝御礼申し上げます。

第 52 回 国際脂質生化学会議 (ICBL) の案内
(コレスポンデンス 五十嵐靖之)

52nd International Conference on the Bioscience of Lipids
30 August ~ 3 September 2011, Warsaw, Poland



2011年8月30日から9月3日の予定でポーランドの首都ワルシャワで第52回国際脂質生化学会議が開催されます。コペルニクスやキューリー夫人を生み、また音楽家のショパンが活躍した古都で、復興した旧市街など見所も多い開催地です。今回もふるってご参加ください。

Expanding the Horizons of Lipidomics

会場: Old Library of the University of Warsaw

Ewa Swiezewska, Agnieszka Dobrzyn, Laszlo Vigh, Ivan Hapala, Jan Kopecky, Joanna Bandorowicz-Pikuła, Barbara Tudek, Wirginia Janiszowska, Tadeusz Chojnacki, Jolanta Barańska, Katarzyna Jagiełło-Wilgat, Katarzyna Król

Registration: Till April 30, 2011, Late registration from May 01, 2011

Abstracts: Submission deadline May 01, 2011

Accommodation: Hotel Sofitel Warsaw Victoria at special rates
for conferees and accompanying persons (booking deadline May 31, 2011)

Oral sessions: 1. Lipids in molecular medicine 2. Lipids in regulation of gene expression 3. Lipids in signaling and intracellular trafficking 4. Membrane microdomains, lipid binding proteins and membrane repair 5. Lipid modifications of macromolecules 6. Isoprenoid lipids 7. Lipid-protein interaction **Poster session:** - full time access to the posters will be provided

詳しくは以下のホームページを参照ください。http://www.icbl-2011.org

恩恵に感謝して

秋田大学 大学院医学系研究科 生体防御学講座

石井聡

このたびは、日本脂質生化学会の幹事としてご承認下さいまして、大変光栄に存じます。浅学非才の身ではありますが、努力して責務を果たす決意であります。どうかよろしくお願い申し上げます。「脂質生化学研究誌」に寄稿する機会を賜りましたので、自己紹介として以下、私の研究経歴を述べさせていただきます。

1990年の春に日本たばこ産業(JT)に入社して生命科学研究所に配属され、そこで与えられたテーマが「ヒト5-リポキシゲナーゼの機能解析」で、これが私の脂質研究との出会いでした。それまで、東京工業大学の研究室(生命理学科: 戸和夫教授)で大腸菌のプラスミドの高次構造をテーマとして毎日アガロースゲル電気泳動ばかりを行っていた頃とは、当然のことながら研究内容は一変しました。HPLCを使った5-リポキシゲナーゼのアッセイは、はじめは扱いに不慣れで難儀していましたが、研究をはじめると暫くすると没頭していったことが懐かしく思い出されます。今思えば、その後の研究テーマは現在まで「脂質」で一貫しており、私はとても運に恵まれていたと思います。

JTで脂質研究に携わっていた縁で、入社3年目から東京大学医学部第二生化学講座(現・大学院医学系研究科 生化学分子生物学講座 細胞情報部門: 清水孝雄教授)に研究生として受け入れていただく機会に恵まれました。そこで私に与えられたテーマは血小板活性化因子(PAF)受容体の生体機能を過剰発現マウスと欠損マウスを使って明らかにする、というものでした。PAF受容体は、第二生化学講座で研究をされていた本田善一郎先生(現・東京大学 医学部附属病院 講師)が1991年に世界初の脂質に対するGタンパク質共役型受容体(GPCR)としてクローニングに成功した分子で、生体機能の解明が急務でした。そこで当時、日本におけるマウス発生工学の草分けとして知られていた東京大学医学部疾患遺伝子制御(サンド)講座の宮崎純一先生(現・大阪大学 大学院医学系研究科 幹細胞制御学講座 教授)、生田宏一先生(現・京都大学 ウイルス研究所 生体防御研究分野 教授)に共同研究をお願いし、ご尽力を得て両マウスを樹立することができました。これらのマウスを研究対象にして多岐にわたる解析を行い、アレルギーや炎症の増悪化(長瀬隆英先生: 現・東京大学 医学部附属病院 呼吸器内科 教授との共同研究)、破骨細胞活性化(引地尚子先生: 現・九州歯科大学 歯学部口腔科学講座 教授との共同研究)などをはじめとして、PAFの多彩な生体機能を明らかにすることができました。このような業績を上げられたのは、清水先生のご指導と多くの素晴らしい共同研究者に恵まれていたおかげであります。

この一連のPAF受容体の研究を進めている過程で、籍をJTから第二生化学講座に移し、次に取りかかったのがリガンド未同定のGPCR(オーファンGPCR)の脂質リガンド探索でした。当時、ヒトゲノムプロジェクトの進行とともにオーファンGPCRが数多く存在することが徐々に明らかになっており、「オーファン GPCR の中に脂質をリガンドとするものがあるのではないか」という作業仮説を

試せる状況でした。第二生化学の助教授だった横溝岳彦先生（現・九州大学 大学院医学研究院 医学分野 教授）の協力や多くの大学院生の努力の甲斐あって、PAF 受容体と相同性が高いオーファン GPCR の中から、リゾホスファチジン酸（LPA）をリガンドとする 2 つの受容体（LPA4 及び LPA6 と命名）、さらに（結果的には脂質がリガンドではありませんでしたが）プロトンを感じる受容体（TDAG8）を同定することができました。

私は、今年 2 月より秋田大学 大学院医学系研究科 生体防御学講座を担当することとなりました。これからも研究生活を続けていける機会に恵まれたのは、大変うれしい嬉しいことであります。これまでに受けてきた数多くの恩恵への感謝の念を忘れることなく、今後も脂質研究に精進していく所存です。そして研究はもとより教育や、脂質生化学会での活動を含めたその他の職務において、できれば今度は人に感謝されるような貢献ができればと願っております。皆様、ご指導ご鞭撻のほど、どうかよろしくお願い申し上げます。

いつの日かこの目で確かめたい

順天堂大学医療看護学部 生化学研究室

同大学院医学研究科環境医学研究所

岩淵和久

私が本格的に脂質生化学を学ぶようになったのは、ワシントン大学の箱守仙一郎先生の研究室に留学させていただいたことがきっかけです。私は大阪大学大学院薬学研究科で修士課程を修了後、順天堂大学の生理化学研究室（現 生化学第二講座）に助手として採用され、山下辰久教授のご指導の下で好中球の自然免疫応答について研究を行っておりました。修士課程の時から血球を用いた研究をしていました関係から、血球間相互作用、特に接着分子の糖鎖構造と機能に着目した血小板由来接着阻害因子の研究を行っていました。その過程で、白血球の接着分子の糖鎖構造が、血球の種類だけではなく、動物の種類によってもかなり違っていて、その反応性も随分と異なることに気づきました。特にセレクトリン分子は自らがレクチンとして作用するだけではなく血球ごとに異なる糖鎖構造を持つことで、各血球が独自の役割を果たしているように見え、どのような分子機構かを明らかにしたく箱守先生の門をたたきました。研究室に出勤した初日に先生から、“セレクトリンの研究もとても大切ですが、今はもっと大切な研究があるので、まずはそれを 3 ヶ月だけやってみてくれませんか。それが一段落したらセレクトリンの研究も始めるから”と言われて始めたのがスフィンゴ糖脂質のグリコシグナルドメイン（スフィンゴ糖脂質の膜マイクロドメイン）の研究でした。以来、今だに研究は一段落せず、セレクトリンに関する研究は宿題になったままとなっています。

僅か 2 年の留学生活でしたが、大変多くのことを学ぶことができました。私が糖脂質を扱った経験が無いということで、箱守先生は直接脂質の分離・精製や分析法を私にお教え下さいました。研究室では、糖鎖同士の相互作用の特異性がスフィンゴ糖脂質の結合特異性と生物機能発現を決めているという先生の考えに基づいて膜マイクロドメインの研究を進めていました。今振り返って考えてみると、先生の考えておられた概念が私のそれまで抱いていた糖鎖に対する考えに大変近かったことが今まで膜マイクロドメインの研究を続けてきた理由ではないかと思えます。その当時、先生の最大の関心事は、スフィンゴ糖脂質の膜ドメインとカベオラが異なるドメインであることを証明することでした。ミーティングのたびにそのことを熱く語っておられ、私は自分に与えられた課題が一段落したら、自分がそれまで日本で行ってきた方法を応用してその課題をやってみようと思っていました。半年ほどで行っていた実験がほぼ終わりそうになった時に、膜マイクロドメインが Triton 存在下で不溶性であることに着目して実験をしたところ、予想外にあっさり期待通りの結果が得られました。ちょうど廊下ですれ違った先生に、出たばかりの X 線フィルム上の結果をお見せしながら説明した時の先生の大層喜ばれた姿が今でも印象深く残って

います。

順天堂大学に戻ってから、教室が専門としている血液の免疫生化学研究の一環として、ヒト好中球における膜マイクロドメインの研究をすることになりました。好中球は成熟して末梢血に入ると 48 時間以内にアポトーシスが誘導されて、自然死してしまいます。ですから、分子生物学的手法を取り入れた実験はどうしても培養細胞を使わなくてははいけません。前骨髄性白血病細胞株である HL-60 は、好中球系細胞に分化誘導させることで、様々な好中球機能を発揮します。ヒト好中球には、中性のスフィンゴ糖脂質であるラクトシルセラミド (LacCer) が大量に発現しており、活性酸素産生や食食などの細胞機能の発現に関与しています。そこで、LacCer の膜マイクロドメインを介した情報伝達機構と、食食反応に伴う分子動態を明らかにすることを目指しました。しかしながら、HL-60 細胞は好中球系に分化させても LacCer を介した機能を示さず、膜マイクロドメイン依存的な食食も示しませんでした。大発見のように箱守先生に電話で報告したところ “それは既に観察しており、よく知られたことです”と、即座にお答えになりました。ただ、“LacCer が沢山発現しているが、なぜ生物機能がないのかは分からない”とのことでしたので、その研究を私の日本での研究テーマにさせていただきたいとお申し、お許しを頂きました。それから、いろいろと調べる内に、どうやら細胞内の情報伝達分子が LacCer のドメインに会合できないため活性がないことが分かり、脂質成分を調べたところ、LacCer の HPTLC 上で二本のバンドの内、上側のバンドが極端に少ないことに気づきました。LacCer が二本のバンドで泳動される意味など気にもしていませんでしたが、分子種を同定したところ、上側のバンドには炭素数 24 の脂肪酸鎖を含む LacCer が多く含まれており、細胞膜上ではこの分子種が極端に少ないことが分かりました。これが私にとってスフィンゴ糖脂質の脂肪酸鎖が多様であることを興味の対象として認識した初めての実験結果でした。偶然、市販の LacCer がその由来によって C24 の脂肪酸鎖を沢山含むブタ由来の LacCer と、ほとんど含まない牛ミルク由来のものがあることに気づき、細胞にそれぞれを取り込ませたところ、ブタ由来の LacCer の場合のみ LacCer が細胞内情報伝達分子と会合し、LacCer を介した好中球機能が HL-60 細胞で再現させることができました。その後、スフィンゴ糖脂質の C24 脂肪酸鎖の重要性が他のグループからも次々と明らかにされ、とてもうれしく思っています。

一方、膜マイクロドメインが本当に細胞膜上にあって、機能ドメインとして働いていることを明示することは大変難しい課題です。日本に帰国してまもなくの Gordon カンファレンスで理化学研究所の小林俊秀先生にお会いし、意気投合してそのことを一緒に明らかにしようということとなり、小林先生の研究室で共焦点レーザー顕微鏡を使って好中球の食食過程における LacCer と他の分子との共局在や動態をリアルタイムに観察しました。食胞膜に移行した細胞膜の LacCer が目の前で再び細胞膜へと戻っていったり、他の小胞へと移行したりする様子を観察し、細胞膜上の LacCer が食食に伴ってダイナミックに動き回ることを実感しました。しかしながら、解像度に限界があり、LacCer が機能ドメインとして細胞膜上に存在し、どう動いているかを明らかにするまでには至っていません。

室温 35 度近くの暗い部屋の中で夢中になって見ていた、モニター上で繰り広げられた LacCer の膜ドメインを中心とした分子の会合と離脱のダイナミックな動きがどうなっているのかをいつの日かこの目で確かめたいと思っています。

「脂質研究の新たなパラダイムを目指して」

大阪バイオサイエンス研究所 神経細胞生物学部門 榎本和生

私のはじめて学会発表させて頂いたのは大学院修士課程2年時で、札幌での脂質生化学研究会でした。修士課程では、井上圭三先生（現・帝京大）と梅田真郷先生（現・京都大）のご指導のもと、ガングリオシドの細胞内動態について研究を行いました。蛍光標識した糖脂質の化学合成は、都臨床研の鈴木明身先生（現・東海大）の研究室で一からご指導頂きました。細胞ガン化に伴い、ガングリオシド GM3 の細胞内動態が変化することを見出し、発表させて頂きました。博士課程からは、リン脂質分子の非対称分布の細胞生物学的意義の研究に移行しました。具体的には、ホスファチジルエタノールアミン (PE) に結合するペプチドを用いて、PE の膜ダイナミズムを可視化しました。並行して、PE の膜非対称性に異常をきたした変異細胞株を単離するという遺伝学的アプローチをとりました。西島正弘先生と久下理先生（国立感染研細胞化学部）にご指導頂き、約2年の歳月をかけて何とか CHO 変異細胞株を単離することができました。これらのツールを用いて、PE の膜動態が細胞分裂の時空間制御に重要であることを示すことができました。

その後、都臨床研、カリフォルニア大学を経て、平成18年に国立遺伝学研究所で自らの研究室を主催する機会に恵まれ、平成22年4月から大阪バイオサイエンス研究所にラボを移動しました。現在私どもの研究室では、外環境により脳神経ネットワークが再編をうけるメカニズムに興味をもって研究を進めております。順遺伝学的手法 (forward genetics) をもちいて脳神経ネットワーク再編に異常をもつ変異体のスクリーニングを行うと、機能未知な脂質代謝酵素や輸送関連分子などが原因遺伝子として多く捕まってきます。普通の神経科学者のセンスでは、それらは「ノイズ」もしくは「ガレージ」として扱われ、注目される可能性は低いかと思われます。逆に、私どもは、これらの因子群に着目すれば、脂質の新たな神経機能、ひいては新たな脳神経ネットワークの制御機構を明らかにできるのではないかと期待して研究を進めています。非常に幸運なことに、遺伝研に着任してすぐ JST さきがけ（西島正弘統括）のサポートを頂き、これまで3年半研究を行い、少しずつではありますが新たな芽が出てきています。表現型解析から得られた100%客観的な情報を大切に、五感を研ぎ澄ませてハードワークすれば、必ずや脂質研究の新たなパラダイムを指し示してくれるような成果が得られると信じて研究に取り組んでおります。今後とも、ご指導ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。

「 ω 水酸化酵素 —今はまだマイナーですが—

福山大学生命工学部 菊田安至

獣医師を目指していた私が進路で悩んでいた時に、大阪市立大学医学部の楠瀬正道教授に声をかけていただいたのがきっかけで、脂質生化学研究に足を踏み入れることになりました。1986年に楠瀬先生の研究室の大学院学生となって、大阪府豊中市の国立療養所刀根山病院の一角にある研究室で脂質研究をはじめました。この研究室の母体である刀根山結核研究所と刀根山病院は、古くから脂質生化学研究が盛んな所で、建物や設備が少し古びていましたが、必要なものは何でもそろっていました。

私がそこで最初に頂いた研究テーマは「ウサギ肝臓の脂肪酸 ω 水酸化酵素 (P450) の精製」で、その成果は1988年に東京の学士会館で行われた第30回脂質生化学研究会で発表させて頂きました。当時は、酵素の精製に成功したら次は cDNA クローニングを行うのが常道になっていて、私もそれに倣うことになりました。ところが、精製酵素のクローニングはすぐに終わっていたので、まずはウサギ小腸粘膜に発現する酵素 (CYP2J1) の cDNA をクローニングし、次のターゲットになったのがヒト白血球のロイコトリエン B_4 (LTB₄) ω 水酸化酵素 (P450LTB ω , CYP4F3) でした。1990年に大阪市立大学大学院を修了後、福山大学工学部（2002年からは生命工学部）に移り、そこでこの酵素の cDNA クローニングを開始しました。以後は CYP4F サブファミリーの分子種を中心に、 ω 水酸化酵素の一次構造、酵母内で発現した酵素の性質、そしてゲノム構造などを調べてきました。

ω 水酸化酵素は、ヒトや実験動物の肝臓、腎臓、小腸、子宮、耳下腺及び白血球などに広く分布していて、プロスタグランジンなどのイコサノイドや中長鎖の脂肪酸などを基質とします。また、 ω 水酸化酵素は大きく分けて CYP4A と CYP4F の2つのサブファミリーに分類され、CYP4A は脂肪酸とプロスタグランジンを、CYP4F はアラキドン酸、ロイコトリエンそれに薬物を主な基質とします。 ω 水酸化酵素は脂肪酸分解の促進や生理活性脂質の合成・分解に関わることから、肥満の抑制、高血圧、炎症反応の制御に関係すると考えられています。ところが、このような多様な性質が本酵素の生理的意義をわかりにくくしています。例えば、実験動物の肝臓ではペルオキシソーム誘導剤によって CYP4A 酵素が誘導され、 ω 水酸化反応により脂

脂肪酸の分解を促進します。また、同じ酵素が腎臓の近位尿管や小腸と大腸の粘膜上皮、耳下腺の導管上皮細胞にもあって、こちらは $\text{Na}^+\text{-K}^+$ ATPase の調節に関与しているとされています。これらの酵素活性もフィブレート剤の投与によって誘導されますが、全く異なる機能がどのように調節されているのかは分かっていません。

一方、ヒトの CYP4F 酵素のうち、好中球で LTB_4 を不活性化する CYP4F3 と精嚢腺でプロスタグランジンを代謝する CYP4F8 以外の CYP4F 分子種の生理機能は明確ではありません。CYP4F2、CYP4F3B、CYP4F11、CYP4F12 は、肝臓などのいくつかの臓器に発現していますが、 LTB_4 の代謝活性は CYP4F3 と比べてかなり弱いため、その他の生理的基質が存在すると考えられています。実験的には、これらの酵素は 6-*trans*- LTB_4 、ヤリボキシシン A_4 、リボキシシン B_4 、8-HETE、12-HETE などの多様なイコサノイドと一部の薬物を代謝しますが、どれが生理的基質なのかは確認されておらず、さらにこれらの酵素の誘導機構も不明です。

そこで、現在私は、生体内基質の検索に重点を置いた「 ω 水酸化酵素の生理的役割の解明」に取り組んでいます。生体内の ω 水酸化代謝産物の分析を通して、生体内基質を明らかにしようとしています。2010 年の第 52 回脂質生化学会で発表させていただいたように、LC-MS を使っての ω 水酸化脂肪酸の分析には目処が付き、現在は含有量がずっと少ない代謝産物の解析に取り組んでいます。 ω 水酸化酵素が肥満や炎症の制御に重要な役割を果たしているのか、それとも単なる器用貧乏な酵素にすぎないのか、その答えを探しています。

今から 25 年前に研究を開始した当初、私は脂質生化学については素人同然でした。脂質生化学研究会に初めて出席した時、他の講演者の発表で少しゆがみのある TLC の結果に対してとても厳しい意見が出るのを見て、恐い学会だと思っていました。ところが、実験ではほとんどタンパク質や遺伝子を相手にしていたので、学生には言いにくいのですが、今でも TLC やガスクロが苦手なままです。最近になって極微量の ω 酸化代謝産物の分析を行うようになり、基礎を十分に学ばなかったことを後悔しています。

脂質生化学会には 20 年以上もお世話になっていますが、「脂肪酸の ω 酸化」という現在の脂質生化学ではあまり目立たない分野に携わってきたためか、他の先生のお力になるような場面がほとんどありませんでした。これからは、名門「刀根山結核研究所」の出身者として、自分の専門にとらわれず広く脂質生化学研究を見ていこうと思いますので、よろしくお願いいたします。

まじめな脂質生化学者への第一歩？

神戸大学農学研究科 生命機能科学専攻 応用生命化学講座 動物資源利用化学分野

白井 康仁

この度は、幹事にご推薦いただき、誠にありがとうございます。大変光栄に存じますと同時に、身の引き締まる思いであります。この機会に、私の自己紹介をさせていただきたいと思います。

私が「脂質」というものを意識したのは大変遅く、もう学位を取得して 3 年ほどたった平成 9 年頃でした。ちょうどその頃、神戸大学バイオシグナル研究センターに助手として赴任することになりました。このセンターの設立には、当時神戸大学の学長をされていた西塚泰英博士が御尽力された経緯から、ほとんどの研究者が細胞内シグナル伝達におけるプロテインキナーゼ (PKC) 関連酵素の研究をしておられました。ご存じのように、PKC は 10 種のサブタイプからなり、ホスファチジルセリンやジアシルグリセロール (DG) で活性化され、増殖や分化など様々な細胞応答に関与している酵素群です。私も例外ではなく、緑色蛍光蛋白質 (GFP) を用いた PKC の細胞内動態の可視化というテーマに取り組みました。幸いなことに、カルシウムや DG アナログによる PKC の細胞質から細胞膜への移行 (トランスロケーション) を世界に先駆けて報告することができました。ただ、その頃の我々の疑問は「PKC は、10 種のサブタイプで、どのようにして多様な機能を発揮しているのか？」ということでした。当時、アラキドン酸をはじめとする脂肪酸やセラミドなど様々な脂質が、サブタイプ特定的に PKC を活性化することが知られていましたので、これらの脂質が PKC のトランスロケーションに及ぼす影響を調べました。すると、異なる脂質は同じサブタイプであっても異なる細胞内コンパートメントへ PKC をトランスロケーションさせること、さらに同じ脂質であってもサブタイプが違えばそのトランスロケーション先が異なることがわかりました。つまり、様々な脂質が「PKC が細胞内のいつ・どこで働くか」を決定するのに重要であり、複雑なトランスロケーションの組み合わせが、PKC 機能の多様性を可能にしていると考えに至りました。しかし、後述しますように、その全貌は未だ明かになっていません。

一方、この PKC 研究を通して 2 つの酵素に興味を持ちました。ひとつは、ホスホリパーゼ A_2 (PLA_2) です。といいますのも、上述のような研究経緯から、DG だけでなく脂肪酸も脂質シグナルとして重要な働きをしているのではないかという思いを強くしておりました。しかし当時、アラキドン酸はエイコサノイドなどの生理活性物質の前駆体であり、脂肪酸が脂質性シグナルであるとはあまり考えられていませんでした。そこで、脂肪酸とホスホリパーゼ A_2 について勉強するため、カリフォルニア大学サンディエゴ校の Dr Edward Dennis に師事することに致しました。そこでは、 PLA_2 もまた、PKC と同様、細胞内の様々な場所にトランスロケーションし、様々な場所で脂肪酸が産生され

うることを見つめました。現在でも、一般的には、脂肪酸が脂質性シグナルであるという認識は低いのかも知れませんが、脂肪酸の受容体が報告されたときには、非常にうれしかったことを覚えております。

もう一つの酵素は、DG をホスファチジン酸 (PA) に変換するジアシルグリセロールキナーゼ (DGK) です。この酵素との出会いはかなり衝撃的でした。まだ、私が PKC 研究をはじめた間もない頃、カルシウム非依存性 PKC のトランスロケーションが、カルシウムの非存在下でも起こるかどうか調べていました。予想通り、カルシウム非存在下でもトランスロケーションは見られました。しかし、DG アナログによる PKC のトランスロケーションは通常可逆的なのですが、カルシウム非存在下で一度細胞質膜に移行した PKC は細胞質に戻ることはありませんでした。この実験結果をきっかけに、カルシウム依存的に DG を代謝する酵素 (type I DGK) の研究を始めるに至りました。その後、DGK も脂質及びサブタイプ依存的にトランスロケーションし、PKC の細胞内局在を調節していることを明らかにしました。現在では、PKC との機能協関に着目しながら、神経系や細胞周期制御、糖尿病合併症における DGK の機能についても解析し、日々悪戦苦闘しております。

ここまでお話ししてくると、すでにおわかりだと思いますが、私はあまり「脂質」と真正面から向き合ってきたとは言えません。せいぜい、DG や PA 量を測ったことしかありません。脂質生化学会の某先生にも「白井先生は脂質研究をしましたっけ？」と冗談(?)を言われるくらいです。そこで、この度脂質生化学会の幹事に加えていただけると、古巣の農学部に戻ったのをきっかけに、まじめな(?)脂質生化学者としての新たな第一歩を踏み出そうと思っております。上述のように、これまで私が扱ってきた酵素の細胞内局在において、「脂質」は重要な働きをしておりました。また現在では、PKC や DGK 以外の多くの酵素も細胞内局在を変化させることが報告されていますが、これらの局在変化において、「脂質」は非常に重要であるという思いをさらに強くしております。しかし、未だ脂質がどのようにして、酵素の細胞内局在を変化させているのか、その全貌は不明です。そこで、PKC や DGK を用いて脂質による高次構造変化をみてみたいと思っています。また、DGK の機能においては、膜脂質変動が key であることはまちがいありません。特に、細胞周期制御においては、核 PKC や DGK の核内移行と核内脂質変動が密接に関連していると思われることから、皆様のお力をお借りしながら核内脂質の解析にも取り組んでいきたいと思っております。

最後になりましたが、この場をお借りしまして、PKC のイロハを教えて下さった西塚先生や斎藤先生、私の DGK 研究を快く受け入れて下さいました加納先生や坂根先生をはじめとする、これまでお世話になった先生方に感謝申し上げます。また、こんな私を、いつも温かく迎えて下さった脂質生化学会の皆様に深く感謝致します。まだまだ未熟ですが、これからは皆様と力を合わせ、日本脂質生化学会の発展に精一杯尽力する所存でございますので、今後ともご指導・ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。

会の活動状況

1 第 52 回日本脂質生化学会・研究集会の開催

実行委員長 : 群馬大学大学院医学系研究科生化学分野・和泉 孝志 教授
日時 : 平成 22 年 6 月 14 日(月)、15 日(火)
場所 : 群馬県伊香保 森秋旅館
演題数 : 特別シンポジウム 4、シンポジウム 13、ランチョンセミナー 2、一般演題 67、参加者 207 名

2 平成 22 年度日本脂質生化学会・総会の開催

平成 22 年 6 月 14 日(月) 第一会場にて開催された。

総会次第

西島正弘会長の挨拶の後、以下の議事が進行された。

(1) 平成 21 年度事業ならびに決算報告

平成 21 年度事業報告ならびに決算報告がなされ了承された。

(2) 平成 22 年度事業計画ならびに予算案

平成 22 年度事業計画ならびに決算報告がなされ了承された。

(3) 役員・幹事の選出

平成 23~24 年度の新役員が承認された。

会長 和泉孝志
庶務幹事 原俊太郎
会計幹事 保坂公平
会計監査 西島正弘

平成 23~26 年度幹事の選出：平成 22 年 12 月 31 日までの任期の幹事に加え、以下の 5 名の新幹事が推薦され、了承された。

石井聡 (秋田大)、菊田安至 (福山大)、白井康仁 (神戸大)、岩瀬和久 (順天堂大)、榎本和生 (大阪バイオサイエンス研)

(4) 平成 23 年度 (第 53 回) 学会準備状況の報告

実行委員長 : 理化学研究所脳科学総合研究センター・平林義雄 先生
日時 : 平成 23 年 5 月 12 日(木)、13 日(金)
場所 : ホテル東京ガーデンパレス

(5) 平成 24 年度 (第 54 回) 学会実行委員長の選出

九州大 伊東信教授が実行委員長に選出された。

(6) 脂質データベース構築委員会の活動報告

・JCBL 大会ページの wiki による構築について
第 52 回日本脂質生化学会の案内を実行委員会側で作成して JCBL ホームページに掲載、次回からは同じテンプレートを利用して大会案内を掲載する
・第 52 回日本脂質生化学会で、ランチョンセミナー 1「脂質研究に役立つデータベース紹介」とデータベースのデモを開催
・平成 22 年度科研費研究成果公開促進費の重点データベースに採択された。

3 平成 22 年度日本脂質生化学会・第 1 回幹事会

日時 : 平成 22 年 6 月 14 日(月)
場所 : 5F 観山
議事 : 上記総会に同じ

4 平成 22 年度日本脂質生化学会・第 2 回幹事会

日時 : 平成 22 年 11 月 26 日(金) 18:00-20:00

場所：東大薬学部 10F 会議室

議事

- (1) 平成 22 年度事業報告、決算案の審議がなされ、了承された。事業案は上記総会報告、決算は巻末を参照されたい。
- (2) 平成 23 年度事業計画、予算案の審議がなされ、了承された。

1) 平成 22 年度事業報告

役員	会長	西島正弘	(平成 22 年 12 月 31 日迄)
	庶務幹事	新井洋由	(同上)
	会計幹事	小林哲幸	(同上)
	会計監査	脊山洋右	(同上)

会員数 645 名 (平成 22 年 11 月 15 日現在)
(名誉会員 27 名、正会員数 618 名)
新入会 34 名
退会 25 名 (会費未納による除名 9 名含む)
(年度末退会希望 4 名)

会費納入率 79.4% (平成 21 年度末実績 80.9%)

2) 平成 23 年度事業計画

役員	会長	和泉孝志	(平成 24 年 12 月 31 日迄)
	庶務幹事	原俊太郎	(同上)
	会計幹事	保坂公平	(同上)
	会計監査	西島正弘	(同上)

名誉会員

山川民夫 (名誉会長)、赤松 稔、池澤宏郎、市原宏介、植田伸夫、遠藤 章、小野輝夫、鬼頭 誠、齊藤国彦、鈴木邦彦、脊山洋右、武富 保、内藤周幸、永井克孝、野沢義則、野島庄七、箱守仙一郎、橋本 隆、林 陽、飯田静夫、藤野安彦、牧田 章、矢野郁也、山田晃弘、山本 章、山本尚三、和久敬蔵

幹事

(任期 平成 23 年 12 月 31 日迄)

青木淳賢、青山俊文、阿部敏明、荒木英爾、五十嵐靖之、猪川嗣朗、和泉孝志、板重広重、井上圭三、入谷信子、梅田真郷、及川真一、大島美恵子、岡本光弘、奥山治美、川口昭彦、菊川清見、久下 理、久保田勝、黒木由夫、小林哲幸、齋藤政樹、渋谷 勲、須貝昭彦、杉田陸海、鈴木明身、田中 進、谷口直之、玉井洋一、中川靖一、中野益男、中村和生、中山玲子、名取泰博、野間昭夫、平林義雄、廣野治子、深見希代子、宮崎 章、柳田晃良

(任期 平成 24 年 12 月 31 日迄)

新井洋由、板部洋之、井上裕康、上田隆史、太田明徳、大西正男、岡島史和、賀佐伸省、加納英雄、楠瀬正道、小林俊秀、清水孝雄、菅野道廣、高橋吉孝、秦 葭哉、平山 修、堀内正公、松澤佑次、宮下和夫、三輪匡男、保田立二、山下 哲、山田信博、吉岡 亨、吉本谷博、渡部紀久子

(任期 平成 25 年 12 月 31 日迄)

厚味敏一、猪飼 篤、伊東 信、大木和夫、岡崎俊朗、笠間健嗣、金保安則、唐澤 健、木原章雄、楠 泰典、古賀洋介、坂根都夫、里内 清、菅谷純子、杉浦隆之、杉本幸彦、鈴木 聡、瀧 孝雄、田口 良、竹縄忠臣、寺本民夫、中島 茂、中西義信、原俊太郎、保坂公平、松本幸次、村上 誠、室伏きみ子、矢富 裕、山下 純、横田一成、横山和明、横山信治

(任期 平成 26 年 12 月 31 日迄)

池田郁男、石井 聡、岩渕和久、岩森正男、植田和光、上田夏生、内海英雄、榎本和生、菊田安至、小堤保則、佐々木雄彦、佐藤隆一郎、島崎弘幸、白井康仁、杉本博之、鈴木康夫、高桑雄一、多久和陽、塚谷博昭、徳村 彰、二木鋭雄、西島正弘、花田賢太郎、宮澤陽夫、横溝岳彦

賛助会員:17 社 (計 53 口)

- (5 口) 小野薬品工業 (株)、塩野義製薬 (株)、中外製薬 (株)、明治製薬 (株)
(4 口) アステラス製薬 (株)、第一三共 (株)、大正製薬 (株)
(3 口) 旭化成ファーマ (株)、大日本住友製薬 (株)、大鵬薬品工業 (株)
(2 口) 大塚製薬工場 (株)、花王 (株)、寿製薬 (株)、ヤクルト本社 (株)、雪印メグミルク (株)
(1 口) キュービー (株)、エー・イー企画 (株)

事業

イ) 平成 23 年度 (第 53 回) 学会

実行委員長：理化学研究所脳科学総合研究センター・平林義雄 先生

日時：平成 23 年 5 月 12 日 (木)、13 日 (金)

場所：ホテル東京ガーデンパレス

ロ) 脂質生化学研究 53 巻発行

演題募集 (Circular2011 の発行時に)	1 月初旬
演題申込および原稿締切	2 月下旬
プログラム編成会議	3 月上旬
入稿	3 月下旬
講演集発送	5 月初旬

ハ) 脂質生化学研究 Circular2011 の発行

ニ) 会議

日本脂質生化学研究会総会	平成 23 年 5 月 12 日
第 1 回幹事会	平成 23 年 5 月 12 日
第 2 回幹事会	平成 23 年 12 月下旬

(3) 第 53 回日本脂質生化学会の準備状況について平林義雄先生から説明があった。

(4) 日本脂質生化学会・脂質データベース構築委員会 (八杉悦子先生) より活動報告があった。

1. JCBL 大会ページの wiki による構築について
 2. JCBL の歴史・沿革 (学会ホームページ <http://jcbi.jp>) に掲載
 3. Lipidbank wiki の進捗状況について
- 平成 22 年度科研費研究成果公開促進費、重点データベース (5 年間) の交付

(5) 西島会長および複数の幹事から、平成 24 年度以降の年会費の値上げについての議論がなされた。

日本脂質生化学会
平成22年度決算報告及び平成23年度予算（案）

収入の部 項 目	平成22年度		平成23年度
	予 算	仮決算 (11月30日現在)	予 算
正会員会費	2,000,000	1,596,000	2,000,000
賛助会員会費	900,000	530,000	900,000
講演集売上	100,000	90,000	100,000
広告収入	700,000	654,150	700,000
利子	1,000	0	1,000
雑収入	10,000	23,987	10,000
小計	3,711,000	2,894,137	3,711,000
前年度よりの繰越金	2,948,627	2,948,627	2,827,886
計	6,659,627	5,842,764	6,538,886

支出の部 項 目	平成22年度		平成23年度
	予 算	仮決算 (11月30日現在)	予 算
研究集会補助	900,000	900,000	900,000
会報製作費	180,000	203,044	180,000
講演集製作費	880,000	694,974	880,000
旅費	100,000	26,700	100,000
郵送・通信費	450,000	352,405	450,000
事務用品費	100,000	74,550	100,000
会合費	100,000	119,145	100,000
謝金	50,000	0	50,000
総会経費	10,000	0	10,000
事務経費	250,000	0	250,000
事務委託費	681,000	644,060	681,000
雑費	10,000	0	10,000
小計	3,711,000	3,014,878	3,711,000
次年度への繰越金	2,948,627	2,827,886	2,827,886
計	6,659,627	5,842,764	6,538,886

* 最終的な決算報告につきましては、平成23年度総会にて報告いたします。

賛助会員

- (5口) 小野薬品工業株式会社
塩野義製薬株式会社
中外製薬株式会社
明治製菓株式会社
- (4口) アステラス製薬株式会社
第一三共株式会社
大正製薬株式会社
- (3口) 旭化成ファーマ株式会社
大鵬薬品工業株式会社
大日本住友製薬株式会社
- (2口) 株式会社大塚製薬工場
花王株式会社
寿製薬株式会社
株式会社ヤクルト本社
雪印メグミルク株式会社
- (1口) キューピー株式会社
株式会社エー・イー企画

日本脂質生化学会 会則

第1条 名 称

本会を日本脂質生化学会(The Japanese Conference on the Biochemistry of Lipids, JCBL)と称する。

第2条 目 的

本会は脂質の領域における化学的、生化学的研究の発展と向上を図り、あわせて研究者相互の連絡および親睦を深めることを目的とする。

第3条 事 業

本会は、第2条の目的を達成するために、次の事業をおこなう。

- (1) 研究集会の開催
- (2) その他、本会の目的を達成するために必要な事業

第4条 会 員

本会の会員には次の種類がある。

- (1) 正会員は、脂質の化学的、生化学的研究に従事し、本会で定めた会費を納入する者。
- (2) 賛助会員は、本会の目的に賛同し、本会を維持することに協力し、本会で定めた会費を納入する者。
- (3) 名誉会員は、幹事会の推薦により、総会の承認で決定される。名誉会員の会費は免除される。

第5条 役 員、幹 事、名誉会長

- (1) 本会は、その運営のために、役員として会長1名、庶務幹事1名、会計幹事1名、会計監査1名をおき、役員会を構成する。
- (2) 本会の運営上の重要事項について役員会の諮問に応ずるものとして幹事をおく。
- (3) 役員および幹事は幹事会を構成し、会務の一切を処理する。幹事会は決定事項を総会に報告し、その承認を得るものとする。
- (4) 名誉会長をおくことができる。名誉会長・名誉会員は幹事会に出席して意見を述べるができる。
- (5) 会長、庶務幹事、会計幹事、会計監査の任期は2年とし、幹事の任期は4年とする、重任はさまたげない。

第6条 総 会

総会は、会長がこれを招集し、次の事項を審議し、決定または承認する。決定または承認は、総会出席者の半数以上の合意を必要とする。

- (1) 予算および決算に関する事項
- (2) 幹事会の提案事項
- (3) 幹事会の決定に関する承認事項

(4) その他

第7条 経 理

本会を運営するために、次の如く経理をおこなう。

- (1) 本会の事業年度は、毎年1月1日より12月31日とし、予算および決算を会報に掲載する。
- (2) 経理は、会計監査によって監査される。
- (3) 当該年度の経理状況は、総会に報告され、その承認を得るものとする。
- (4) 本会の経費は、会費および寄附金による。

第8条 事 務 局

本会は会務に関する一切の事務をおこなうために事務局を置き、庶務幹事がこれを運営して、会員の便宜を供する。

本会の事務局は、〒102-8481 東京都千代田区麹町5-1 弘済会館ビル(株)コングレ内におく。

附則

- (1) 本会則は、総会の承認を経て変更することができる。
- (2) 本会の会費は、幹事会で決定し、総会の承認を得るものとする。

(平成14年6月14日改訂)

(平成17年6月2日改訂)

学会事務の取り扱い内容と連絡先

日本脂質生化学会の事務局は、(株)コングレ内に置き、以下の事務取り扱いを行なっております。

1. 入会・退会の受付
2. 年会費の請求および徴収
3. 所属・住所・氏名等の変更の受付
4. Circular および要旨集の発送とその未着クレーム等の受付

日本脂質生化学会事務局の連絡先

〒102-8481 東京都千代田区麹町 5-1 弘済会館ビル (株)コングレ内

Tel: 03-5216-5588

Fax: 03-3263-4032

E-mail: JCBL@congre.co.jp

日本脂質生化学会の年会費は3,000円です。入会ご希望の方は上記の日本脂質生化学会事務局までお問い合わせ下さい。

日本脂質生化学会 会長 西島正弘

協会 会学ジ主賛福本日

有き条1親

下得も1親科子福来の会、1支所ア会年等、1員会の本本 (2)

油目条2親

の且科者ア会年等、1支所ア会年等、1員会の本本 (2)

美事条8親

ふがこはき美事の本、こいひさき美事の本、こいひさき美事の本 (2)

福商の会条2親

福商が要福の会年等、1支所ア会年等、1員会の本本 (2)

員会条6親

ふがこはき美事の本、こいひさき美事の本、こいひさき美事の本 (2)

ふがこはき美事の本、こいひさき美事の本、こいひさき美事の本 (2)

入福の会年等、1支所ア会年等、1員会の本本 (2)

入福の会年等、1支所ア会年等、1員会の本本 (2)

ふがこはき美事の本、こいひさき美事の本、こいひさき美事の本 (2)

ふがこはき美事の本、こいひさき美事の本、こいひさき美事の本 (2)

員会条6親

員会条6親、1支所ア会年等、1員会の本本 (2)

員会条6親、1支所ア会年等、1員会の本本 (2)

員会条6親

員会条6親、1支所ア会年等、1員会の本本 (2)

員会条6親、1支所ア会年等、1員会の本本 (2)

員会条6親

員会条6親、1支所ア会年等、1員会の本本 (2)

員会条6親、1支所ア会年等、1員会の本本 (2)

員会条6親

員会条6親、1支所ア会年等、1員会の本本 (2)

員会条6親、1支所ア会年等、1員会の本本 (2)

員会条6親

員会条6親、1支所ア会年等、1員会の本本 (2)

員会条6親、1支所ア会年等、1員会の本本 (2)

員会条6親

員会条6親、1支所ア会年等、1員会の本本 (2)

員会条6親、1支所ア会年等、1員会の本本 (2)